世田谷村日記

石山修武

十月六日

渡辺豊和さんから送られてきた二一〇〇年庭園曼陀羅都市を詳読しようと探すも、見当たらない。二Ｆの吹抜けの、作業テーブルの上に置いておいた筈なのに、姿が見えない。良くこういう事はあるが、神隠しならぬ本隠しだろう。何日か振りに良く晴れた朝を迎えられた。やっぱり本は二階のテーブルの上にキチンと置いてあった。本来先ず探すべき処にあった。余程気をつけないと、コレはボケかも知らんな。渡辺さんの最新本は確信犯的能動性ボケ本である。毛綱が死んで、かくの如きヴァーチャルとリアルの境界を行ったり来たりするつまり通俗的に言えばボケ状態、気取って言えばシュールレアリズム状態の建築作家はいなくなってしまったと思われたが、渡辺豊和の著作活動はまさに、その事をボケ状態として体現しているように思われる。今、現実に触れている実物と、頭の中に思い描いているモノとはそれ程の違いはないというのを渡辺が自覚して、これ等の本を著述しているかどうかは知らぬが、少なくとも視覚のリアル、ヴァーチャルの境界はとり払われているように考えられる。それを自覚してなければ、ただの馬鹿だよ。ボケは実にシュールレアリズム状態の自然な身体的現実なのである。

十九時、新木場現場の定例会を終えて、只今地下鉄市ヶ谷駅。新木場から世田谷村へ動く途中で、方々に電話を入れる。しかも、時代遅れの公衆電話から。ケイタイはとり敢えず死ぬ迄持たぬと決めたが、それ自体が何か差しさわりがあるわけではない。しかし、まわりの人間のほとんど全てが持っている現実がある。マア一種の、一周遅れの孤立状態になっているわけだが、この孤立には何の誇示も感じられぬところが切ない。自転車に乗れないとか、自動車の運転も出来ないとか、そういう類の、もはや身体的なハンディキャップ状態なのかも知れない。でもケイタイは持たない。いずれ電話も使わなくする。手紙、葉書きだけのコミュニケーションにするのが夢だ。その先は想うだけの交通が良い。

十月七日

九時四〇分杏林病院の六階のカフェテラスでコーヒーを飲んでいる。久し振りの病院は少しばかり懐かしい。河野鉄骨の世田谷村改装工事が今朝から着手。

ここ半年間身体の洞穴の中で薄闇をみつづけていた様な気がする。六〇才になる迄一度も病院のお世話になる事もなく、平穏に過ごしてきた。それが私の通俗性や、平板な人格を形づくってきた事もあるだろう。六〇才になった途端の病院通いは、ある意味では好運であった。二年遅れたら、もう「時」はとり返しがつかなかったろう。気力を振りしぼったり、身体を酷使して難問に取り組む年令ではない。自分の元々あるやも知れぬ地、つまり基礎体力を信じて、自然にやるしかないだろう。

今日は午後、仙台からアトリエ海の佐々木さん、奈良から渡辺豊和が、私の展覧会を訪ねてくれるので、会場に出掛けてみなくてはならない。驚いた事に杏林病院の担当医の先生も展覧会場に足を運んでくれたようだ。十一時、２ヶ月前に入れてしまった明日の予約を変更するために５Ｆに移動して待っている。待つのもあんまり苦にならなくなってきた。十四時南青山へ向かう。十五

時半、ときの忘れもの着。意外や意外、沢山の人が展覧会場に来て下さっていた。藤森照信と会場で会う。彼のＴＶ番組への出演以来である。藤森はいつ会っても藤森である。十七時過渡辺豊和と東大本郷へ。技術と歴史の会。十八時東大。鈴木博之レクチャー。装飾と技術。彼の建築の世紀末に描かれていた世界が継承されていた。三〇年前と全く変わりがない思想である。再び安心する。鈴木もいつ会っても鈴木だ。建築に於ける近代批判が鈴木博之の原点であった。原点という言葉の古さ、荒さを考えてみても、それは確固として在る原基点であった。今日のレクチャーはそれを良く示していたように思う。言葉の言い廻しや、使う素材の変化はあっても深部は揺らいでいない。

十月八日

八時二〇分新宿。鶴間へ。十時より森の学校、第二回目の入札。森の学校、工事業者決まる。十一時半古木理事長と昼食。ようやく前へ進める。十四時半大学。連絡事項をチェックしただけで、打ち合わせもできず。すぐに3年設計製図。これではいけないと思いつつも、どうしようもない。十七時過大学発。十八時神田、岩戸へ。馬場照道、仏教伝道協会松林氏、広島前市長平岡敬氏と会食。只今、二十一時四十五分新宿発京王線車中。ひろしまハウスＮカンボジア、静けさのパビリオンＮフィンランド共に、価値ある仕事なのだが、金にならないところが切ないところだね。

十月九日

大型台風接近。展覧会最終日。十一時世田谷村発、南青山ときの忘れもの、会場へ向う。京王線はそれでも沢山の人が電車に乗っている。ここ十年で最大級の嵐が来るというのに、皆さんタフなんだな。あるいは無防備というか。子供の姿が多いのも奇異である。十二時前展覧会場。十九時迄、台風下、沢山の人に会えた。終了間際佐藤健の一人息子論が来て、有終の美。終わり良ければ全て良し。論に連れられて、池尻のＢａｒに寄って、帰宅。池尻のＢａｒは健が生前良く立ち寄っていて、論と時々会ったという、話には聞いていたところ。これで一区切ついた。展覧会はやって良かった。